

LOCALISM



ある日の、いつもの
かけがえのない時間

夫婦が暮らす家の東には畑が広がっていて、定年退職後農業に本腰を入れたご主人が今日も野菜の世話を動んでいます。そこへ娘さんとお孫さんと一緒にやってきました。真っ黒に日焼けしたおじいちゃんの顔がほころびます。その様子を居間で見ていたおばあちゃんが台所に立ちます。

お孫さんはおじいちゃんが育てたキュウリが大好きです。娘さんが親しんだ漬け物や煮物と一緒にお茶の用意ができました。



No_ **02**
Special Report.

Builder:
井坪工務店

Note:
飯田市/K邸
家族構成/2人

家が継いでいくもの



元大工 杉本 一明さん
井坪工務店の元大工。創業者・井坪務とも仕事し、職人の技と心を磨いた。施主のKさんとは同年の友人。

連続性を保つ工夫がありました。気の置けない人なら玄関を通さずともこんなふうには話を楽しめずし、掃き出し窓の沓脱ぎ石に置いた下駄を履いてぶらり散歩に出るのにも、畑で採れた作物を仮に置いておくのにも、都合のいい空間です。

特に外へ向けては、「およりて」（飯田弁で「寄って行ってください」とさりげなく人を誘い、ついで時間と空間を共にする、歓迎のしるしのような）です。

お茶請けは、家のすぐ脇の畑で採れた野菜や近くの山から掘ってきた筍でこしらえた手料理です。いつもの味にいつもの笑顔がこぼれます。

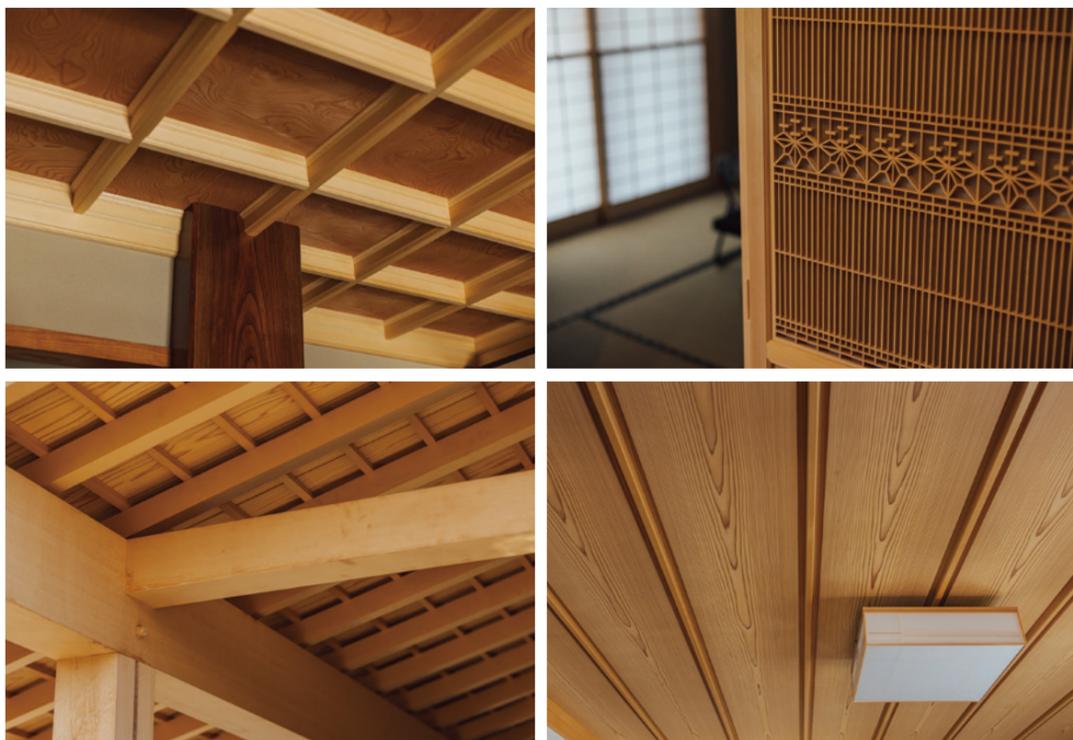
純和風の平屋で、南側全体に大きな軒がかり、その下には夏の日差しを遮りながら清々しい風のゆく空間が広がっています。居間の前に据えた石のテールを囲んで今日も自然と人が集まり、お茶の時間が始まりました。この家の向かいに住む娘さんやお孫さんも、そんなお茶会の常連さんです。

日本家屋にはもともと、軒や縁といった形で自分の領域の輪郭をぼかしながら、周りとの

大きくかけた軒は
外へ向けた歓迎のしるし



設計士 棚田 勝さん
井坪工務店に入社し大工として現場を担当した後、設計に携わり、今は工務店設計士リーダーを務める。

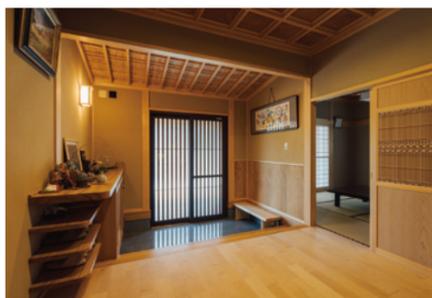


同じ飯田市内で代々続く家をリニア新幹線の整備で手放さざるを得なくなったKさんは、これまでどおり家のすぐ近くで畑をつくる暮らしがたくて、いつも見てきた南アルプスをこれからも日々眺めたくて、この土地を探し当てました。そして、住み慣れた旧宅と同じ和風の家を建てようと思いました。

思い出深い家がたたえていた風格を新しい家でも表せるとしたら、井坪工務店の他にはありません。Kさんは小学校に上がる前からの友人で、井坪で長年大工をしてきた杉本さんに相談します。すでに一線を退いていた杉本さんでしたが、井坪の棟梁や大工たちを見守る立場として協力することを決めました。

杉本さんは自身のもてる技術と知識を現場に惜しみなく伝え、現場がそれに応えます。玄関がそう。和室の竿天井がそう。そして軒のつくりがそう。そうした助言の数々は、いま井坪に現役で働く若き棟梁や大工、設計者たちに大きな刺激を与えました。

住み慣れた家の風格を
この新しい家にも



建具の細工の細やかさ、天井の造形の巧み、軒天の頼もしさ、収まりの美しさ、随所に職人の魂と技が生きている。



和風住宅の風格と和の心を凝縮した玄関。思わず背筋が伸びる緊張と、きっと帰ってきたいと願う安らぎがある。



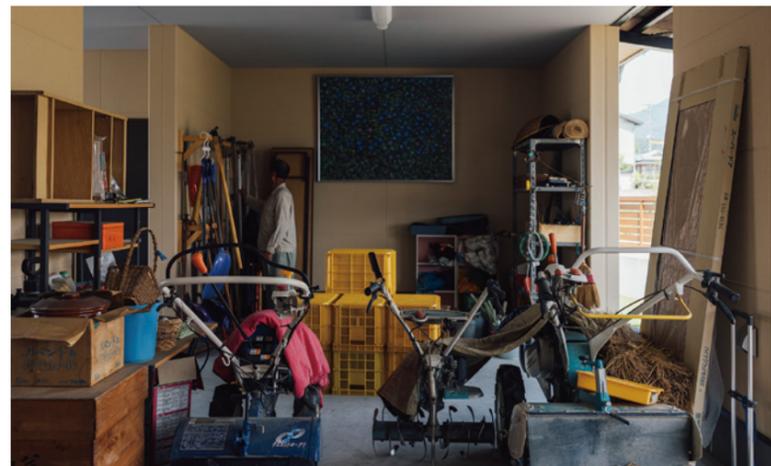
娘さん夫婦の家は隣、息子さん夫婦の家も近くにあり、お孫さんたちが頻りに訪れては畑で、家で遊んでいく。駐車場脇には趣味のゴルフの練習場を設けた。



家づくりは技を伝え、心を伝え、人をつなぐ

在来工法と吟味した素材、職人の技で和の格式と和の心をつくり込む井坪工務店の和の家「MU」は、創業者・井坪務が築いた同社の家づくりの原点を継承するブランドです。K邸の建築は、その創業者と現場に立っていた杉本さんが「MU」の精神性をあらためて次代へしかと手渡した仕事でもありました。

「一度建てたら親戚同様のお付き合いを。家をつくったら守るのが当たり前」との創業者の思いも、確実に受け継がれました。Kさん一家と井坪の社員はお客と業者の関係を超えて打ち解け、信頼し合っています。そう。家づくりは技を伝えるのみならず、人の心を伝え、人と人をつなぐのです。Kさんが前の家の庭から移植した柿と柚子がこの土地にも根付き、実をつけました。前の暮らしの大切な記憶も、畑仕事の喜びも、お茶請けの味も、軒下の笑顔もこの家は継いでいます。東の空には今日も南アルプスが映えていました。



大屋根とこれを継ぐようにかけた軒の傾斜はなだらかで、伊那谷の穏やかな風土を思う。駐車場には農機具を置くスペースもしっかり確保し、存分に農業と向き合える。

